

Title	毛沢東の野坂参三宛て書簡
Sub Title	A letter from Mao Zedong to Nosaka Sanzo
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio) 徐, 一睿(Xu, Yirui)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2011
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.104, No.2 (2011. 7) ,p.321(169)- 332(180)
JaLC DOI	10.14991/001.20110701-0169
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20110701-0169">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20110701-0169</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資 料

## 毛沢東の野坂参三宛て書簡

寺 出 道 雄  
徐 一 睿

### （1）はじめに

本稿では、慶應義塾が所蔵する現代史史料である、「水野資料」に含まれた、毛沢東の野坂参三宛て書簡を紹介する。同資料には、毛沢東の野坂参三宛て書簡が2通含まれている。本稿では、そのうち、より史料的な価値が高いと見なしうる、1945年5月28日付の書簡を取りあげる。

なお、「水野資料」のなかの毛沢東書簡については、すでに、同資料が慶應義塾の所蔵となる以前に、加藤（2004）によって、日本語訳の紹介がおこなわれるとともに、その内容についての検討がおこなわれている。しかし、ここでは、中国語での原文の紹介はおこなわれていない。本稿では、その原文の紹介をおこ

なうとともに、加藤（2004）とは若干異なった視点から、その内容について一つのありうる解釈を簡単に付すことにする。

### （2）史料について

#### 1. 史料の背景

1940年の初め、当時、日本共産党代表としてコミンテルン（第3インターナショナル）の執行委員会幹部会員であった野坂参三は、モスクワを出発し、中国革命の根拠地である延安に向かった。同年4月初旬、彼は、延安に到着した。出発したモスクワは雪が深かったが、到着した延安はもう雪解けを越していたと、戦後の彼は回想している<sup>(1)</sup>。

野坂が延安へ向かったのは、中国沿岸から日本への密航の手段を見いだすためであった。

(1) 野坂参三の延安滞在については、野坂（1949/63）による。彼が、日本への帰国前にモスクワに立ち寄ったことは、日本共産党中央委員会（1994）による。

日本共産党中央委員会は、1935年に壊滅し、獄外に残された黨員たちの活動も、36年のうちには、ほぼ終焉させられていた。37年における日中戦争の開始後には、日本国内における共産主義者の活動は、散発的なものにとどめられていた。

そうしたなかで、野坂は、日本への密航を企てたのである。

しかし、日本への密航という野坂の希望は、中国共産党中央委員会の認めるところとはならなかった。密航はほぼ不可能であるし、あえてそれをおこなっても、無駄死にするだけであるというのが、彼らの判断であった。野坂は、延安にとどまり、八路軍政治部に所属して、日本の現状を調査するとともに、対日本軍の政治工作にあたることになった。

野坂は、1940年のうちに「日本人反戦同盟」を結成し、41年には「日本工農学校」を設立した。日本軍に対する宣伝活動と、日本軍の捕虜に対する政治教育をおこなったのである。また、彼は、日本の現状に関する論説を、中国共産党機関紙『解放日報』などに発表した。

こうした野坂の延安滞在は、1945年8月における日中戦争の終結の後、同年12月までつづいた。その12月、彼は、延安から奉天省の遼寧に向かい、いったんモスクワを訪れた後、46年1月、16年ぶりに日本に帰国した。

延安に滞在中、野坂は、当初、「林哲」という変名を用いた。日本人とも中国人ともとれる名前を工夫したのだという。そして、1943

年5月、コミンテルンが解散した後は、モスクワ時代の「岡野進」という、よく知られた変名を用いた。コミンテルンの幹部であった彼が、何処で活動しているかは、コミンテルンの機密に属する事柄であるが、その解散後は、そうした配慮の必要がなくなったことによるのであろう。

慶應義塾が所蔵する2通の毛沢東書簡のうち、1通は「林哲」宛てであり、もう1通は「岡野進」宛てである。

前者は、1943年3月15日付であり、野坂が『解放日報』3月19日付号に発表する、「日本工農学校、記念「三一五」」に対する感想を述べたものである。後者は、1945年5月28日付であり、野坂が中国共産党第七次全国代表大会（45年4月23日～6月11日）でおこなった報告の公表原稿に対するコメントを述べたものである。その野坂報告は、同年4月、毛沢東の政治報告、朱徳の軍事報告につづいておこなわれ、『解放日報』5月29日付号に「建設民主的<sup>(2)</sup>日本」として発表された。

本稿で原文の紹介をおこない、一つのありうる解釈を簡単に付すのは、後者の「岡野進」宛ての、1945年5月28日付の書簡である。

## 2. 史料の外観

1945年5月28日付の毛沢東書簡は、薄手の中国紙（縦29cm、横21cm）2枚に毛筆で書かれている。また、それを収めた封筒（縦16cm、横8cm）は、やや厚手の中国紙製のもので

---

(2) 以上の両書簡に「年」の記載はないが、それは、加藤（2004）で確定されている。それらの「年」については、近代中国研究委員会（1967・68）によって、追認しうる。

あり、その中心部は、紅い線で囲まれている。

書簡本文の筆跡は、王他（2004）に掲載されている、毛沢東書簡の写真版における筆跡と対比することによって、彼の自筆であると判断しうる。書簡本文に薄く見える下線は、毛筆で引かれているが、本文は黒字であるのに対して、それは青味がかっている。したがって、その下線が、毛によるものであるかどうかは確定できない。封筒にある「信書、名刺」（「名刺」の部分には消線がある）という毛筆による筆跡は、毛の自筆ではない。毛の秘書など、彼の側の関係者の筆跡であろうと推測できる。封筒そのものは、王他（2004）の写真版に掲載されている、毛書簡の封筒と同種のものであると判断しうる。

書簡本文の末尾に薄く「在很」と読める2字は、鉛筆で書かれている。それは毛の自筆ではない。封筒の紅枠外の書き込みも同様である。それらは、過去にこの書簡を扱った者が書き加えたものであろう。

### (3) 史料原文と日本語訳

#### 1. 史料

史料の写真を次頁以降に掲げるとともに、原文（繁体字および簡字体。引用符は変更）と日本語訳をしめそう。その訳は、原文の形式的でない調子を活かしておこなった。

##### a. 原文（繁体字）

岡野進同志：

此件看了，覺得很好，使我懂得了日本共產黨的具體綱領。關於沒收壟斷資本（操縱國民生

計的東西）一條，確定得很正確，這在英國，法國的共產黨都是如此，中國黨也是如此，現在日本黨又有了。只有美國共產主義仍還沒有這條綱領。也許那裏的情況是特殊的，他們不提此點乃有他們的理由；但是我，頗感懷疑，覺得他們沒有找到出路；此點還待研究，希望你提供意見。去年出版的白勞德同志的《德黑蘭》一書，你見了沒有，希望你看一下，將來我們談一次。

此外，有幾處小的地方，開列于下：

15 頁，2 行，“新兵和老兵比較多”，是否為“新兵較老兵為多”，如果是，似宜改一下。

31 頁，5 行，“上下級指揮官”，上下級三字似以去掉為宜。同頁 9 行，“大小政治家”，大小二字似改“反動”二字為宜。同頁，10 行，“下層法西斯分子”，下層二字似宜去掉。同頁，11 行，“思想檢事等”之下，似宜加上“中的積極分子”等字。這個問題，目前宣傳時期，不宜牽涉得太廣泛；待將來實行時期，依照群眾發動的程度，臨時伸縮處理，似較有利。

37 頁，10 行，“盡速由一般人民”，盡速二字似可去掉。這個投票問題，那時究竟以速為有利，或似以緩為有利，要看情況才能決定。依我估計，日本人民不要天皇，恐怕不是短期所能做到的。

以上，請加斟酌，並送博古發表，廣播。

同志的敬禮！

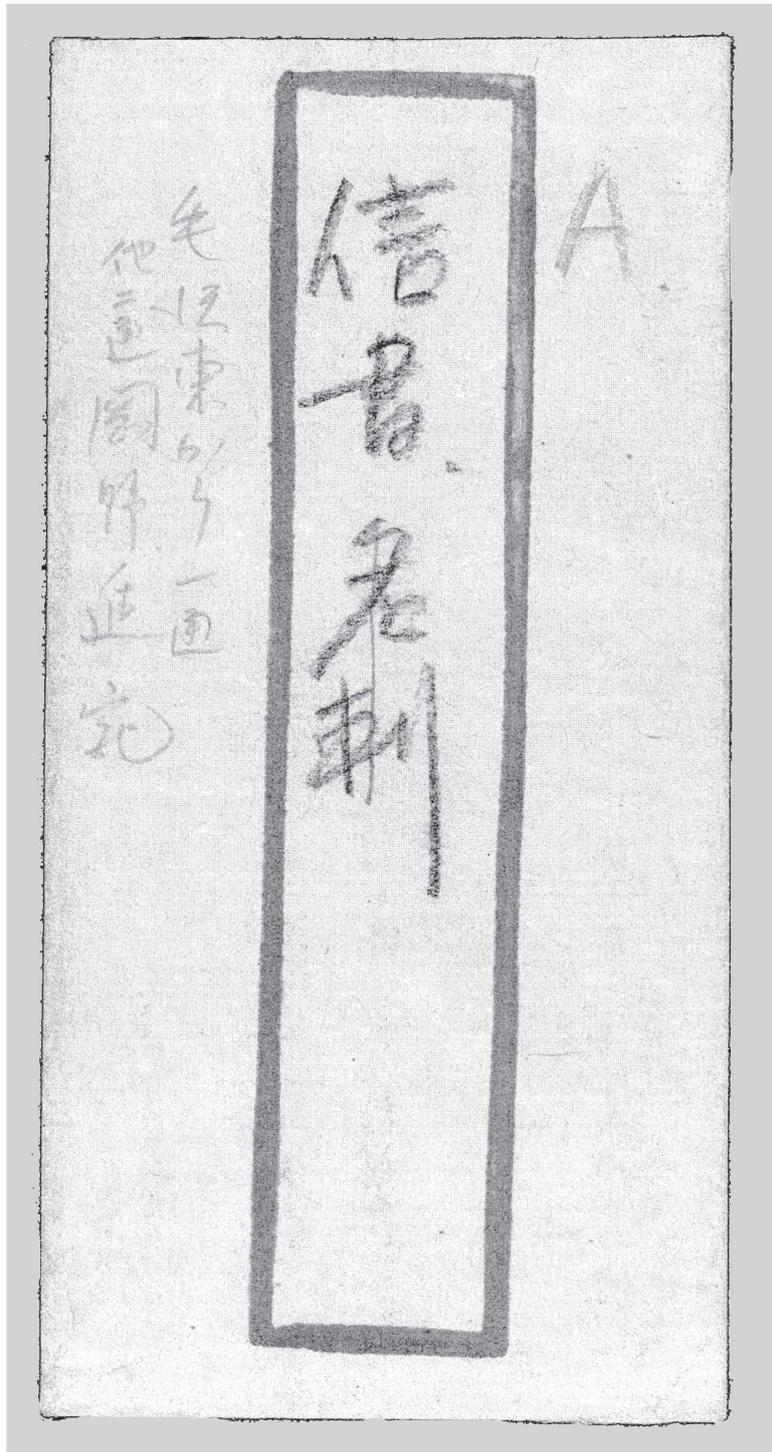
毛澤東 五月二十八日

\* 「沒收壟斷資本」に下線。

##### b. 原文（簡字体）

岡野进同志：

此件看了，觉得很好，使我懂得了日本共产



周野述册：

此件看下来觉得很好，但不懂得了解共  
产的具体组织。周野述册（苏联  
国民经济的东西）一稿，内容得很正确，且在英国  
法国的共产党都是以此，中国共产党也是以此，现在  
共产党又有了解。苏联共产党还没有这条稿子  
也许有些情况是特殊的，他们不懂这些乃有他  
的理由；但是我颇感怀疑，觉得没有找出出路。  
此点值得研究，希望你提供意见。去年出版的白  
带德月总论（德黑兰）一书你见了没有，希望你看一  
下，将来我们谈一次。

此外，有些要小的地方，周列于下：

15页，2行，新党和老党比较多，是否为新党较老  
为之意，如果是，似宜改一下。

31页，5行，上下级指挥官，上下级三字似可  
掉为宜。

同页9行，大小政治家，大小二字似可  
掉为宜。

反部<sup>7</sup>一<sup>7</sup>等<sup>7</sup>宜。同页，10行，<sup>2</sup>下<sup>7</sup>层<sup>7</sup>学<sup>7</sup>西<sup>7</sup>始<sup>7</sup>行<sup>7</sup>，<sup>2</sup>下<sup>7</sup>层<sup>7</sup>学<sup>7</sup>似<sup>7</sup>宜<sup>7</sup>封<sup>7</sup>掉。同页，11行，<sup>2</sup>思<sup>7</sup>想<sup>7</sup>振<sup>7</sup>事<sup>7</sup>等<sup>7</sup>之下，<sup>2</sup>似<sup>7</sup>宜<sup>7</sup>加上<sup>7</sup>中<sup>7</sup>的<sup>7</sup>接<sup>7</sup>担<sup>7</sup>字<sup>7</sup>等<sup>7</sup>字。未<sup>7</sup>，<sup>2</sup>这<sup>7</sup>个<sup>7</sup>问<sup>7</sup>题<sup>7</sup>，<sup>2</sup>目<sup>7</sup>前<sup>7</sup>宣<sup>7</sup>传<sup>7</sup>时<sup>7</sup>期<sup>7</sup>，<sup>2</sup>不<sup>7</sup>宜<sup>7</sup>步<sup>7</sup>骤<sup>7</sup>得<sup>7</sup>太<sup>7</sup>展<sup>7</sup>开<sup>7</sup>；<sup>2</sup>符<sup>7</sup>外<sup>7</sup>实<sup>7</sup>行<sup>7</sup>时<sup>7</sup>期<sup>7</sup>，<sup>2</sup>依<sup>7</sup>照<sup>7</sup>层<sup>7</sup>级<sup>7</sup>展<sup>7</sup>开<sup>7</sup>的<sup>7</sup>程<sup>7</sup>度<sup>7</sup>，<sup>2</sup>原<sup>7</sup>则<sup>7</sup>时<sup>7</sup>伸<sup>7</sup>缩<sup>7</sup>空<sup>7</sup>握<sup>7</sup>，<sup>2</sup>似<sup>7</sup>较<sup>7</sup>有<sup>7</sup>利<sup>7</sup>。

37页，10行，<sup>2</sup>儘<sup>7</sup>速<sup>7</sup>办<sup>7</sup>一<sup>7</sup>般<sup>7</sup>人<sup>7</sup>民<sup>7</sup>，<sup>2</sup>儘<sup>7</sup>速<sup>7</sup>等<sup>7</sup>似<sup>7</sup>可<sup>7</sup>研<sup>7</sup>究<sup>7</sup>。<sup>2</sup>这<sup>7</sup>个<sup>7</sup>投<sup>7</sup>票<sup>7</sup>问<sup>7</sup>题<sup>7</sup>，<sup>2</sup>那<sup>7</sup>有<sup>7</sup>完<sup>7</sup>全<sup>7</sup>以<sup>7</sup>速<sup>7</sup>为<sup>7</sup>有<sup>7</sup>利<sup>7</sup>，<sup>2</sup>或<sup>7</sup>以<sup>7</sup>慢<sup>7</sup>为<sup>7</sup>有<sup>7</sup>利<sup>7</sup>，<sup>2</sup>要<sup>7</sup>看<sup>7</sup>情<sup>7</sup>况<sup>7</sup>才<sup>7</sup>能<sup>7</sup>决<sup>7</sup>定<sup>7</sup>。依<sup>7</sup>不<sup>7</sup>估<sup>7</sup>计<sup>7</sup>，<sup>2</sup>日<sup>7</sup>本<sup>7</sup>人<sup>7</sup>民<sup>7</sup>不<sup>7</sup>要<sup>7</sup>天<sup>7</sup>皇<sup>7</sup>，<sup>2</sup>恐<sup>7</sup>怕<sup>7</sup>不<sup>7</sup>是<sup>7</sup>短<sup>7</sup>期<sup>7</sup>所<sup>7</sup>能<sup>7</sup>做<sup>7</sup>到<sup>7</sup>的<sup>7</sup>。

以上，请加<sup>7</sup>对<sup>7</sup>的<sup>7</sup>，<sup>2</sup>并<sup>7</sup>送<sup>7</sup>博<sup>7</sup>古<sup>7</sup>，<sup>2</sup>恭<sup>7</sup>表<sup>7</sup>，<sup>2</sup>意<sup>7</sup>播<sup>7</sup>。  
可<sup>7</sup>左<sup>7</sup>的<sup>7</sup>敬<sup>7</sup>礼<sup>7</sup>！

在<sup>7</sup>张

王<sup>7</sup>行<sup>7</sup>东<sup>7</sup> 三<sup>7</sup>月<sup>7</sup>十<sup>7</sup>日

党的具体纲领。关于没收垄断资本（操纵国民生  
计的东西）一条，确定得很正确，这在英国，法  
国的共产党都是如此，中国党也是如此，现在  
日本党又有了。只有美国共产主义仍还没有这  
条纲领。也许那里的情况是特殊的，他们不提  
此点乃有他们的理由；但是我，颇感怀疑，觉  
得他们没有找到出路；此点还待研究，希望你  
提供意见。去年出版的白劳德同志的《德黑兰》  
一书，你见了没有，希望你看一下，将来我们谈  
一次。

此外，有几处小的地方，开列于下：

15 页，2 行，“新兵和老兵比较多”，是否为  
“新兵较老兵为多”，如果是，似宜改一下。

31 页，5 行，“上下级指挥官”，上下级三字  
似以去掉为宜。同页 9 行，“大小政治家”，大  
小二字似改“反动”二字为宜。同页，10 行，  
“下层法西斯分子”，下层二字似宜去掉。同页，  
11 行，“思想检事等”之下，似宜加上“中的积  
极分子”等字。这个问题，目前宣传时期，不  
宜牵涉得太广泛；待将来实行时期，依照群众  
发动的程度，临时伸缩处理，似较有利。

37 页，10 行，“尽速由一般人民”，尽速二字  
似可去掉。这个投票问题，那时究竟以速为有  
利，或似以缓为有利，要看情况才能决定。依  
我估计，日本人民不要天皇，恐怕不是短期所  
能做到的。

以上，请加斟酌，并送博古发表，广播。

同志的敬礼！

毛泽东 五月二十八日

\* 「没收垄断资本」に下線。

### c. 日本語訳

岡野進同志：

この件を見ました。とてもよくできている  
と思います。これで日本共産党の具体的綱領  
を理解させてもらいました。壟断資本〔独占資  
本——訳者〕（国民の生計を操るもの）の没収の  
件に関しては、とても正しいと思います。イ  
ギリスやフランスの共産党は全部そうであり  
ます。中国の党もそうであります。今や日本  
の党も〔そうした綱領を——訳者〕持つよう  
になりました。アメリカ共産主義だけがこの綱  
領を持っていません。あそこの状況は特殊で  
あるかもしれません。彼らがこの点を提起し  
なかったのには彼らなりの理由があります；  
しかし私はこれに対して懐疑的であります。  
彼らには出口がないように見えます；この点  
に関しては、さらに研究する必要があります。  
是非、ご意見を聞かせてください。昨年出版  
されたブラウダー〔中国語名・白劳德——訳者〕  
同志の『テヘラン』、あなたは読みましたか。  
是非、お読みになってください。将来それ  
について話し合いたいものです。

そのほかに、いくつか小さいところを修正  
する必要があります。以下の通りです：

15 頁，2 行，「新兵と老兵は比較的に多い」  
は「新兵は老兵より多い」ということですか。  
もしそうであれば、修正した方がいいかもし  
れません。

31 頁，5 行，「上下級指揮官」に関して，上  
下級の 3 文字を取った方がいいかもしれませ

(3) この「15 頁」は、野坂（1945/63）の p.361 にあたる。

(4) この「31 頁」は、野坂（1945/63）の p.375 にあたる。

ん。同頁，9行，「大小政治家」の大小2文字を「反動」に修正した方がいいかもしれません。同頁，10行，「下層ファシスト分子」の下層の2文字を取った方がいいかもしれません。同頁，11行，「思想検事など」の下に，「のなかの積極分子」を追加した方がいいかもしれません。この〔戦犯——訳者〕問題に関しては，今は宣伝期であるため，〔戦犯の対象者を——訳者〕広げることをしてない方がいいかもしれません。将来実行する時期になれば，民衆の発動程度に従って，臨機応変的に処理した方がもっと有利であると思われま

す。  
37頁<sup>(5)</sup>，10行，「なるべく早く一般人民」において，「なるべく早く」という文言を取った方がいいかもしれません。この投票問題に関して，一体早い方が有利か，それともゆっくりした方が有利かについて，状況を見て決定しなければなりません。私の推定では，日本の人民が天皇を不要とすることは，短期的にできるものではないと思います。

以上，ご勘案ください。また，博古〔『解放日報』社長・新華社社長——訳者〕に送って発表，報道させてください。

同志の敬礼！

毛沢東 五月二十八日

\* 「壟断資本の没収」に下線

## 2. 参考史料

参考のために，野坂の「建設民主的の日本」から，毛沢東が，最も重要なコメントを加えた

部分を挙げておこう。

もちろん，われわれがこのように言っているからといって，共産主義者は戦後の日本において，天皇ないし皇室の存続を歓迎しているのではとみなしてはならない。天皇はこのたびの戦争の責任者の一人であり，反動政治と復古思想の象徴である。しかも，戦後に天皇をそのまま維持すれば，反動勢力の残党が天皇を中心に再び集結し，平和と民主政治を攪乱するかもしれない。わが国の民主化のために，それは必ず廃除しなければならない。われわれ共産党は，天皇制と天皇のない徹底的な民主共和国の設立を望んでいる。この目的を達成するために，われわれは人民大衆に宣伝教育をおこなっている。しかし，大多数の人民の意見に背くならば，われわれの願望は実現不可能なものである。もし，大多数の人民が熱烈に天皇の維持を望んでいるのであれば，われわれは彼らに譲歩をしなければならない。そのため，戦後における天皇の存続問題に関しては，私は一般人民による投票をおこなって決定することを提案している。投票の結果，天皇を存続させると決定したとしても，このような状況下の天皇は，専制権を持たない天皇でなければならない。(野坂(1945/63) p.380, より訳出)

(5) この「37頁」は，野坂(1945/63)のp.380にあたる。参考史料を参照。

毛沢東は、以上の参考史料のなかの、「戦後における天皇の存続問題に関しては、私は一般人民による投票をおこなって決定することを提案している」という一文の原文が、「なるべく早く一般人民による投票をおこなって」となっていたものから、「なるべく早く」という語を削除するように、野坂にもとめたのである。

#### (4) 史料の位置

1. この1945年5月28日付の毛沢東書簡の、野坂参三論としての読みについては、加藤(2004)に詳しい。

そこで、ここでは、毛沢東が、同書簡で合衆国の共産主義者、アール・ブラウダー(Earl Browder)の著書である『テヘラン』(*Teheran: Our Path in War and Peace*, 中国語書名、『徳黒蘭、我們在戦争与和平中的道路』)について言及していることに、注目しておこう。<sup>(6)</sup>

その点について述べるためには、当時の、中国共産党と合衆国政府との関係について、簡単に振り返っておく必要がある。

2. よく知られているように、日中戦争の後期、合衆国では、中国国民党(国民政府)と対比して、中国共産党の政治的・軍事的力を高く評価する見解が、中国研究者やジャーナリストの間にひろまった。そのことを受けて、毛沢東を始めとする中国共産党の指導者

たちは、合衆国のジャーナリストとしばしば会見した。

ローズヴェルト政権は、蒋介石政権を支持する政策は堅持したものの、1944年7月、蔣の反対を説き伏せて、「軍事視察団」という名目で、バレット(David Barrett)陸軍大佐の率いるグループを、延安に駐在させた。周恩来は、その視察団の駐在について、「我々の外交活動の始まりと見なすべきである」<sup>(7)</sup>と述べた。毛沢東、朱徳、周恩来らは、たびたび彼らと会見した。

ローズヴェルト政権は、さらに、1944年11月、大統領特使として、ハーレー(Patric Hurley)陸軍少将を延安に送った。毛沢東は、ハーレーと4回にわたって会談した。その会談で、毛・ハーレー間で合意された、国共関係についての5カ条の協定草案は、蒋介石の反対のために実現されなかった。

しかし、1944年11月に合衆国の中国駐在大使に任命されたハーレーを介しての、国共関係の調整に関する交渉は、なおつづいた。日中戦争の終結後、45年8月28日、毛沢東、周恩来らは、ハーレーにともなわれて空路重慶を訪れ、蒋介石と会談を重ねた。その結果、同年10月8日、国共関係についての「双十協定」が締結された。

国共の内戦が再開されたのは、1946年6月26日にいたってであった。

3. ところで、ブラウダーは、1943年11月

(6) 『テヘラン』中国語版の正確な題名は、張(1990)による。

(7) 金編(2000)(下)p.641。

28日から12月1日まで、ローズヴェルト、チャーチル、スターリンによっておこなわれた、テヘラン会談を受けて執筆した『テヘラン』(Browder (1944))において、次のように主張していた。

テヘラン合意でうたわれた、米・英・ソの3カ国が、戦時およびその後の平和時において共同歩調をとるという決定は、世界が向かうべき方向性をしめしている。その否定は、ミュンヘン協定への逆戻りに他ならない。

テヘラン合意にもとづいた国際関係のもとで、合衆国のアジア政策は、旧来の植民地体制の復活を目指すものとなつてはならない。急速に工業化・近代化していくアジアのみが、合衆国に市場を提供していくことができる。対中国政策においては、合衆国にとっての市場の確保という観点からも、経済の発展を目指すことなくそれに寄生する国民党との連携ではなく、経済の発展と国民の生活水準の向上を目指す共産党との連携を追求することが必要である。アジアにおけるソ連邦との提携も、そうした観点からなされなければならない。<sup>(8)</sup>

——毛沢東は、日中戦争の終結を前にした

1945年5月28日、そうしたブラウダーの『テヘラン』について、滞英・滞米経験が豊富な、野坂参三の意見をもとめたのである。ブラウダーは、本稿の付録からも分かるように、中国共産党と関係の深い人であった。

その場合、この時期、毛沢東にとって、合衆国や日本を含む諸国に対する関心の中心事が、書簡の文面にある、それらの諸国における「壟断資本の没収」云々の問題にあつたとは、考えられない。<sup>(9)</sup>彼の関心の中心事は、戦後における、中国とそれらの諸国との関係におかれていた、と見なしうるであろう。

すでに、毛沢東の思考のなかに、日本の敗戦は織り込み済みであった。彼は、書簡と参考史料から読みとれるように、現には敵国である日本について、その敗戦後における、「専制権を持たない天皇」を戴いた政府との共存を構想していたのである。

それでは、国際的な位置付けとしては、事実上の盟邦である、合衆国との戦後における関係について、この時期、毛沢東は、どのように構想していたのであろうか。

4. 1945年4月、合衆国では、ローズヴェ

(8) 以上、Browder (1944) の序文・第1章・第6章を要約した。中国に関する議論は、その第6章 National Liberation in Asia (pp.45-52) でおこなわれている。

なお、Ryan (1986) p.52, を参照。ライアンは、ブラウダーの基本的な主張を、資本主義と共産主義との「平和的な共存と協働」の主張であるとしてとらえている。

(9) ブラウダーは、合衆国において社会主義への移行は政治的視野のうちにふくまれないと考え、1944年、合衆国共産党を解党し、それを共産主義者のビューローに再編した。

Ryan (1986) pp.51-52, および、付録を参照。

もちろん、中国における「民族資本」と「買弁資本」の処理のあり方は、毛沢東にとっての重要な関心事であった。したがって、各国の党が、それぞれの国の「壟断資本」に対して、どのような見解を持っていたかが、彼の関心の外にあつたとするわけではない。しかし、その関心は、あくまでも、中国自身の問題から派生したものであつたと考えるのである。

ルトが死亡し、トルーマンが登場した。一方、同年5月、それまで対米協調のためにブラウダーに対する批判を避けていたスターリンは、その批判を開始した。

17世紀におけるヴァージニアへの入植者を先祖とするブラウダーは、自らを、1776年の愛国者たちや、19世紀の奴隷制廃止論者たちの正統な末裔であると信じていた。<sup>(10)</sup>彼は、政治的ロマンティストであった。一方、毛沢東は、徹底した政治的リアリストであった。今日の眼からすれば、そうしたロマンティスト、ブラウダーの戦後構想と、リアリスト、毛の戦後構想とが不思議に交わった最後の局面において、1945年5月28日付の書簡は書かれたことになるのではないだろうか。

毛沢東は、その書簡で、一見さりげない表現のうちに、慎重に言葉を選んでいる。もし、彼がブラウダーの見解に、単純に否定的であったのなら、彼は、それについての野坂の意見を、わざわざもとめたりはしなかったであろう。この1945年5月28日付の毛書簡は、彼のなかで、戦後の対米関係についての構想が、その執筆時点において、なお、可塑性をおびていたことをしめしているのではないであろうか。

付録 アール・ブラウダー (Browder, R. Earl, 1891–1973) 略歴<sup>(11)</sup>

1920年、共産主義運動に参加。21年、モ

スクワで開催された赤色労働組合インターナショナル (プロフィンテルン) 第1回世界大会に合衆国代表として参加。帰国後、プロフィンテルン合衆国支部にあたる、労働組合教育同盟 (Trade Union Educational League) で活動。

1926年、プロフィンテルン本部の合衆国代表。27年、プロフィンテルンの中国派遣代表として、漢口 (のち上海) に汎太平洋労働組合書記局を設立。28年まで中国に滞在。

1929年、合衆国共産党 (CPUSA) 書記局長。30年、同党の執行書記。34年、書記長。35年、コミンテルン執行委員会幹部会員候補。コミンテルンの人民戦線戦術のもとで、「共産主義は20世紀のアメリカニズムである」 (“Communism is Twentieth-Century Americanism”) のスローガンを採用するも、38年、モスクワの批判によって撤回。39年、独ソ不可侵条約の締結にもかかわらず、CPUSA 政治局内で人民戦線戦術を主張。44年、CPUSA を解党し、共産主義政治協会 (Communist Political Association) を組織。

1945年5月、フランス共産党幹部デュクロ (Jacques Duclos)、モスクワの意を受けて、同党の理論機関誌で、CPUSA の解党と両体制の平和的共存の主張を批判。ブラウダー、同年6月、CPA 会議で、デュクロの批判の受け入れを拒否。同年7月、CPA 特別緊急会議、CPUSA の再建を決議。46年2月、CPUSA、

(10) Ryan (1986) p.48.

(11) 以下、ブラウダーの略歴は、1920年から46年までに限定して紹介する。その内容は、主に、Ryan (1986) により、一部、Gorman (1986)、Lazitch (1986) によった。中国側から見たブラウダー像は、張 (1990) に示されている。

ブラウダーを除名。

(経済学部教授)

(経済学部助教)

#### 参 考 文 献

張月明「白労働」『中国大百科全書』外国歴史 (I)  
中国大百科全書出版社, 1990 年。  
加藤哲郎「『野坂参三・毛沢東・蔣介石』往復書  
簡」『文藝春秋』2004 年 6 月号。  
金冲及主編, 村田忠禧・黄幸監訳『毛沢東伝』(下)  
みすず書房, 2000 年。  
近代中国研究委員会『『解放日報』記事目録』(II)  
(III) 近代中国研究委員会, 1967・68 年。  
日本共産党中央委員会『日本共産党の七十年』(上)  
新日本出版社, 1994 年。  
野坂参三「建設民主的の日本」『野坂参三選集 戦

時篇』北京人民出版社, 1945/63 年。  
——「延安回憶」同上に所収, 1949/63 年。  
王樹山・王建夫『毛沢東書信賞析』山東人民出版  
社, 2004 年。  
董海鵬「抗日戦争時期中共与美国關係的演变」炎  
黄春秋網, 2010 年 5 月。  
Browder, R. E., *Teheran: Our Path in War  
and Peace*, International Publishers,  
1944.  
Gorman, R. A., *Biographical Dictionary of  
Marxism*, Greenwood Press, 1986.  
Lazitch, L., *Biographical Dictionary of the  
Comintern*, The Hoover Institute Press,  
1986.  
Ryan, J. G., Browder, R. Earl, in Johnpoll,  
B. K. and Klehr, H. (eds.), *Biographical  
Dictionary of the American Left*, Green-  
wood Press, 1986.  
Seidman, J., *Communism in the United  
States: A Bibliography*, Cornell Univer-  
sity Press, 1969.